











5. 上で触れられている言語知識の総動員について、言語パターンの内在化がある程度進んでいる学習者にとっては部分暗唱よりも全文暗唱の方が取り組みやすかったのではとの質問がなされた。この質問に対しては、本研究に参加した学習者らは既に相当の目標言語知識を有していたとも考えられ、今後、初～中級の学習者を対象とした調査もしていきたいとの回答がなされた。
6. どのような基準でこのテキストにある FSs が選ばれたのか、また、暗記する情報の「量」に重きが置かれているように見えるが大切なのは情報の「質」なのではとの質問がなされた。前者の質問に対しては、学位申請者の留学経験をベースとして、多くの英会話テキストの横断的な精査も加えてターゲットとすべき FSs が抽出されたとの説明がなされた。この説明に対しては、審査員より続けて、教材の客観性を高める工夫をすべきとの指摘がなされ、今後改善すべき課題のひとつとしたいとの回答がなされた。後者の質問に関しては、どういった情報が暗記するに値するかという「質」の問題は取り組む学習者のレベルであったり目的であったりに応じて異なることが本論文内で指摘されているとの回答がなされた。
7. 先行研究の概観では理論的枠組の説明が十分になされ、モデルの提示もあったが、調査結果を受けた理論面の議論がもっとあっても良かったとの指摘があった。これに対して、そうした議論も充実させるべきであったとの回答がなされた。
8. 研究の再現性の観点から、本研究で用いられたダイアログ集およびスピーキングテストは全て付録に含めるべきとの指摘がなされた。この点については、大学への論文最終提出の際に付すとの回答がなされた。

以上、学位申請者は各委員からの疑問や意見に対して、常に明確に応答ができており、他の細かな指摘・質問に対しても十分な回答を述べ、本論文の限界およびその改善方法についてもきちんと、今後の課題として理解していることを示した。いずれの質疑も本研究の質と量を揺るがすものではなく、より高次元の研究論文へ昇華させるための、また、より幅広い見識を持つ研究者となるための助言と考えられる。

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は外国語暗記指導の理論面および教育実践面の双方における優れた論考であると判断され、学位申請者は当該分野における学術的な寄与を成し得るだけの高い研究能力を備えており、将来にわたり研究者として学界に貢献する研究活動が期待されると判断された。また、非常に質の高い学術英語で書かれている点も高く評価された。したがって、審査委員会は、全員一致で、学位申請者に博士（学術）を授与することが適当との結論に達した。